

国際古楽祭とフランダースと菊池寛

去る4月21日と22日、「第2回たかまつ国際古楽祭」がサンポートホール高松などで盛況裡に開催されました。「古楽」とは、いわゆるルネッサンスからバロック期、最近では19世紀半ばまでの古典派の作品を含む西洋音楽です。それを当時の楽譜をもとに、その時代の楽器を使って、時代考証演奏法により「不完全な美しさ」を持つ当時の独特の響きを再現することを総称して言うそうです。フルート奏者で、現在ベルギーを中心に活躍している柴田俊幸氏が、ヨーロッパで流行しているこの古楽を故郷高松で広く紹介したいと思い立ち、昨年から開催されているものです。その熱意に協力の輪が広がり、ベルギーのフランダース政府からも首相のヘルト・ブルジョワ氏が「我々フランダースの古楽の伝統が、高松のみなさまに佳き時間を提供できることを願っています。」などと記されたご挨拶を寄せていただくなど、全面的な支援を得ています。

さて、このフランダースという地名。懐かしさを感じませんか。そう、アニメにもなった有名な童話「フランダースの犬」の舞台です。そして、その童話を日本に紹介した作家の一人が、今年が生誕130周年、没後70周年にあたる本市出身の文壇の大御所、菊池寛です。彼が芥川龍之介と一緒に編集責任者となって「小学生全集」を出した時、翻訳をした童話の中に、貧しい生活の中でも、いつか芸術家として世にできることを夢見ていた少年「ネル口」と愛犬「パトラッシュ」の悲しい物語があったのです。

今回の演奏会では、創立から30年以上の歴史を持つ檀紙小学校リコーダークラブの児童がベルギー古楽界の横綱的存在であるバロック・アンサンブル、「イル・ガルデリーノ」との共演を果たしました。練習の時から見せていた子どもたちの目の輝きと真剣さは、指導をした団員を嬉し泣きさせたほどだったそうです。「温故知新」という言葉があるように、特に子どもたちが古楽に触れることにより、新しい未来が見えてくる気がしました。

菊池寛が日本の子どもたちのために「フランダースの犬」を訳してから約90年。古楽という癒しの音楽に心地よく身を委ねながら、再び高松とフランダースが結びつき、意義ある文化交流が行われたことを大変喜んでいきます。